

黒田彰子編

新撰歌枕名寄

上

古典文庫

黒田彰子

新撰



寄

上

古典文庫

平成元年八月二十日印刷發行 非売品

寄名枕歌撰新

編者 黒田彰子

上 発行者 吉田幸一

印刷者 白橋印刷所

発行所

114

東京都北区西ヶ原
三ノ三四ノ一二

古典文庫

電話(九一〇)二七一七
振替口座東京九・一四五九七番

目次

解 説	上	三
凡 例	上	三九
新撰歌枕名寄卷第一	上	四
序文	上	四
目録（国別郡名）	上	五
新撰歌枕名寄（国別歌枕細目）	上	六
新撰歌枕名寄卷第二	上	九
新撰歌枕名寄卷第三	上	二六

新撰歌枕名寄卷第四		下.....	三
新撰歌枕名寄卷第五		下.....	三九
新撰歌枕名寄卷第六		下.....	二二
新撰歌枕名寄卷第七		下.....	一八
新撰歌枕名寄卷第八		下.....	二六
新撰歌枕名寄卷第九		下.....	二七
新撰歌枕名寄卷第十		下.....	三四

彰考館蔵『新撰歌枕名寄』解説

一

彰考館蔵『新撰歌枕名寄』は、縦二七・五糎、横二〇・四糎。江戸中期写本三冊。藍色地紋表紙左肩に「新撰歌枕一、二（三、四・自五至十）」の題簽^①。内題「新撰歌枕名寄卷第一（一十）」。「虫損甚しく紙数を確認することはできなかったが、各冊に丁付がほどこされており、それによれば、各冊墨付一四九、一三一、一五三丁。第一冊の一八、一九丁が誤綴されたまま丁付されている。

底本とした彰考館本は、完本としては現在のところ孤本であるが誤りが多いため、よりよい本文の出現がまたれる。ただし、巻三から巻五途中までの抜書本が、西尾市立図書館岩瀬文庫に蔵されているので、これについて略述した上で、彰考館本と比較し、新撰歌枕名寄の原型でさぐってみたい。

岩瀬文庫蔵本は写本一冊。袋綴仮表紙。墨付六一丁。表紙左肩に「新撰 哥枕名寄」と直書する。縦二一・九糎、横一八・五糎。第六〇丁、六一丁は「天神七代」「地神五代」等、本文とは無関係の記事を誌す。虫損甚しく判読困難の箇所が多い。

内容は、第一丁才に「新撰調枕名寄卷第三／東海道十五ヶ国国分配次第
如太子伝 但拔書」と記す如く、拔書本である。また、彰考館本とは記述の形式をやや異にしており、本来の形式がどのようなものであったか疑問も残るのである。

彰考館本では巻一が目録にあてられ、そこに国名、郡名、名所が一括されており、巻二以下の本文では、名所以外はいちいち再録されない。岩瀬文庫本ではこれが以下に掲げる如く記される。

東海道十五ヶ国国分配次第
如太子伝 但拔書

伊賀 伊勢 志摩 尾張 參河 遠江 駿河 伊豆 甲斐 相模 武蔵 安房 上総 下総 常陸

先伊賀国 四郡

阿拝 山田 伊賀 名張

この後は彰考館本と同様、名所をあげ歌を記す。岩瀬文庫本の親本がもとと目録のみで一巻をなす形式ではなかった故か、或いは抜書に際してこれを分割再録したものか不明だが、巻数が彰考館本同様「東海道十五ヶ国」の部が巻三にあつていたので、いまは一応後者の場合を想定しておく。

その他岩瀬文庫本の特色をあげると、まず「尾張国」の項目がないことである。これは「伊豆」「甲斐」「両国」が、歌は全く取られていないが、国名、郡名等は記されていることを考えると、抜書の問題とは別の、何らかの誤り、或いは親本との関係に拠ると思われる。

次に、郡数は、「上総国」を除いて彰考館本に一致する。その他、抜書の程度等、彰考館本と比較すべく、例をあげたい。

彰考館本

岩瀬文庫本

上総国

上総国 十一郡

山辺 武射^{ムサ} 市原府 海上 畔^ア

蒜^{ヒル} 望陀 周^{スミ}□ 天羽 夷隔 埴生^{ハニフ}

長柄

宇麻具多嶺 海上潟 限山 千

草浜

宇麻具多嶺

うまくたの□ろのさし葉の露霜^ニぬれ

うまくたのねろのさし葉の露霜にぬ
てはきはなはこふはそも
れてふ我はこふかそも

てふ我はこふるそも

うまくたのねろにかくろひかくたに

も国のとほるはなかめほりせん

海上潟

万十四
夏芋引うなかみかたのおきつすに舟

夏芋引海上潟の奥つ洲も舟は留めんさ

はとゝめん小夜深にけり

みわたせは玉藻はからて夏そ引うな

かみかたに塩やみつらん

信実

うきねするうなかみかたの奥津すに

田鶴そ鳴なる夜や深ぬらん

知家

夏亭引うなかみ山の椎柴にかし鳥鳴

つ夕あさりして

俊頼

限山

^{懷中}我ためにうき事見えは世中に今はか

きりの山に入なん

千草浜

^同色々のかいありてこそひろはるれ千

草の浜をあさるまに／＼

夜深□けり

見渡は玉もはからて夏亭引うな上方に

塩や満らん

夏亭引うなかみ山の椎柴にかし鳥鳴つ

夕□さりして

俊頼

我□うき事見えは世の中^ニ今は限の

山^ニ入なん

色々のかいありてこそ拾はるれ千草の

浜をあさるまに／＼

枝浜

散^同にける花の名残の恋しさに枝のは
まへをきて見つる哉

枝浜

散にけり花の名残の恋しさにゑたのは
ま辺をきてみつる哉

なお、前述の如く「上総国」のみ郡数が異なるが、彰考館本卷一の目録には、
「上総国七郡 山辺^{ヤマノヘ} 武射^{ムサ} 市原^{イチハラ} 海上^{ウミカミ} 夷隔^{イシヤ} 埴生^{ハナウ} 長柄^{ナガテ}」とある。次に、注
記の例をあげよう。

彰考館本

率都浜

陸奥のおくゆかしくそをもほゆるつ
ほの石文そとの浜かせ 兼行

岩瀬文庫本

壺石文 率都浜

△中略▽

陸奥のおくゆかしくそおもほゆる壺の
石文そとの浜風

右此そとの浜といふ所に、うとふ
やすかたと云鳥の侍るか、此はま

右此そとの浜と云所に、うとふやす
かたと云鳥侍か、此浜のすなこの中

のすなこの中にかくして子をうみ
置るを、母のうとうかまねをして、
うとふくくとよへは、やすかたと
てはい出るをとるそと申。其時母
鳥来りて、あなたこなたへ付あり
き鳴なり。そのなみたの血のこき
紅なるか、雨のことくふるなり。

ある哥に云、

子をおもふなみたの雨の血にふれは
はかなき物はうとうやすかた
とよめり。とる人此血をかゝりつ
れはそんし侍る故に、血をかゝら
しとてみのかさをきるなりと云へ

にかくして子をうみをけるを、母の
うとふかまねを、人なとかうとふ
くくとよへは、やすかたとはる出る
を取とぞ。其時母の鳥来たりて、あ
なた此方付あかり鳴也。其涙の血の
こき紅なる、雨の□く降也。ある哥
に云、

り。哥^ニ、

子をおもふなみたの雨の蓑のうへに
かゝるもかなしやすかたの鳥

子を思涙の雨の蓑の上にかゝるもかな
しやす方の鳥

と読り。

次に、岩瀬文庫本には七八八首が収められているが、このうち彰考館本にはみえない和歌が九首、彰考館本では注記中に引かれている和歌が五首ある。後者については抜書の際に和歌のみをとり本文化したことが考えられるので措くとして、前者の九首について考えてみたい。九首は以下のとおりである。

(ア) 神代より光をとめて朝熊の鏡の宮^ニ すすめる月かな

(イ) 神さひて哀幾代^ニ なりぬらん浪になれたる朝熊のみや

(ウ) 浜名川入塩さむき山下風^(ママ)に高師の沖も荒まさるなり

(エ) 信濃なるすかの荒野にはむ熊のおそろしきまてぬるゝ袖かな

(オ) 上野のいならの沼のおゝる草よそに見し夜は今こそまされ

(カ)なをたのめしめちか原のさせも草我世の中^ニあらんかきりは

(キ)ひとしれするしきものはしのふ山下はふ葛の□みなりけり

(ク)あはれいかに草はの露のこほらん松かせたちぬ宮城のゝはら

(ケ)八雲たつ道は深をあさか山浅くも人の思ひける哉

岩瀬文庫本がこれら九首を収めていることを、彰考館本との比較を通して考えた。
い。(オ)は岩瀬文庫本で「伊奈良沼」という所名に対応する和歌である。彰考館本では巻一の目録に「伊奈良沼」とあるものの、本文には所名、和歌ともなく、目録との不整合をみせている。

(ア)イはいずれも「朝熊宮」を詠んだものだが、彰考館本では、この部分に巻一の目録によっても訂しえない混乱がみられる。以下にその部分を掲げよう。

風宮

1496 この春は花をおしまてよそならん心を風の宮にまかせて

朝熊宮

西行

1497 神風や玉くしの葉を取かさし内外の宮に君をこそ祈れ

俊恵法師

1498 神風や内外の宮の宮はしら千たひや君か御代に立らん

星合浜

1499 七夕のあかぬ別れのつな手縄星合の浜やとまり成らむ

齋宮出雲

―線を付した部分から明らかなように、1497 1498 の二首は、掲出された名所「朝熊宮」に対応していない。これを巻一の名所目録によつて検するに、「風宮 朝熊宮 星合浜 竹都」とあり、目録とのずれも認められない。つまり 1497 1498 は「朝熊宮」という名所をあげながら「内外宮」の詠をおいているのである。この部分に対応する岩瀬文庫本は、以下のとおりである。

朝熊宮 内外宮 星合浜 竹都齋宮前

(ア) 神代より光をとめて朝熊の鏡の宮^ニすめる月かな

(イ) 神さひて哀幾代^ニなりぬらん浪になれたる朝熊のみや

内外 神風や玉くしの葉を取かさし内外の宮に君をこそ祈れ

七夕のあかぬ別のつなてなは星合の浜やとまりなるらん

つまり彰考館本は何らかの理由で、本文においては「朝熊宮」とおきながら和歌を欠落させて次の「内外宮」の和歌をおいた形になっており、目録では「内外宮」が全く存しないことになっている。目録の誤りと本文の混乱の先後を決する資料はいまないが、この例をみる限りでは、彰考館本は目録、本文共に相当の混乱を含む伝本であることに注意しなければならない。集付や作者名の混乱は枚挙にいとまがない程で、それらの中には、単なる書承上の誤りと考えうるものから、より根本的な誤りと考えざるをえないものまでが混在するのである。そこから本来の新撰歌枕名寄の形を想定するには、相当慎重を期さねばならないが、(ア) (イ) (ウ)の九首は、岩瀬文庫本が独自に有する歌というよりは、新撰歌枕名寄に本来収められていた歌と考えた方がよいのではないかと考える。というのは、後述の如く、新撰歌枕名寄は、澄月の歌枕名寄からの抄出という性格をもっているが、上述の各歌は、(ウ)を除いてすべて同書に収められているからである（各歌を渋谷虎雄氏

編「校本歌枕名寄本文篇」の歌番号によって示せば以下のとおりである。(ア) 2418
(イ) 2416 (ウ) 2769 (エ) 3745 (オ) 3804 (カ) 補 2216 (キ) 補 2237 (ク) 補 2277。(ク)については、問題が残るが、岩瀬文庫本で同歌は行間に細字で書かれている上、墨色も異なるので或いは後の補入とも考えられ、存疑のまま今は一応右の推論を示しておきたい。

以上二種の伝本に即して新撰歌枕名寄の原型を推考したが、以下では、彰考館本に基づき本書の性格を考えたい。

二

新撰歌枕名寄十巻のうち、第一巻は序及び目録から成るが、このうち目録は二つの要素から成っている。即ち、「目録」と冠した上で、

第一 序并配帖次第

第二 五畿内五箇国

第九 西海道十一箇国